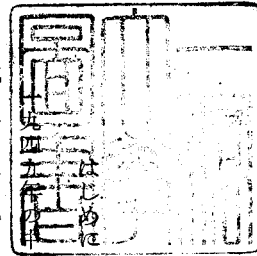


『五反運動』の性格について

石 川 滋



抱き合いたいわけの「官僚資本」が没收され國有化されたのを除いて、廣大な民族資産階級とその企業が、新しい國家、新しい生産力の擔手の一つとして、そのまゝ生き残ったことであつた。戰共期、ネップ期のソ連と比べ、また「解放」後の東ヨーロッパ諸國と比べて、中國には資本家階級とのもっとも高次の形の「共存」が示されたわけであるが、それから一九五三年末以後における、私的資本セクターの急激な國家資本主義セクターへの轉換——いいかえれば民族資産階級の決定的な人民權力への從屬の時期にいたる變革の跡をたどってみると、われわれはそのもっとも重要なモメントとして、どうしても一九

『五反運動』の性格について

五二年上半期の『五反運動』につきあたらざるをえない。

『五反』運動とは、「行賄、偷税漏税、國家資財盜竊、偷工減料、國家經濟情報盜竊」という主として國家との關係における資本家の違法行為——『五反運動』中の言葉でいえば資本家の『五毒』——に反對する運動であつた。それは半年にわたつて、全國の大中市にくり擴げられ、全商工業企業の一割ないし二割五分の「守法戸」を除く大部分が、大小の程度に『五毒』に關係し、『五反運動』の打撃を受けるといふ廣汎な影響を及ぼした。しかし、『五反運動』の目的は、決して資本家の偶發的、個別的な違法行為の處理に止まらなかつた。それはより一般的に、中國における資本の特殊な活動様式の制限を狙い、また、もっと重要なことは、この運動の最前線に、

店員、職工、資本家家族、同業者を動員し、それと「闘争」せしめることによって、中國の資本家階級のよって立つ基盤であった家族制度、温情主義およびギルド精神の破壊を企てたことであつた。今日ふりかえつてみて、この企ては、『五毒』一掃という直接目的より以上に、成功的であつたといえるであらう。

いうまでもなく、資本といい、資本家階級といつても、中國のそれは特殊な存在であつた。そこには定型的な資本主義の發達はみられず、近代的な階級分化もなかつた。そこで家族の親和、勞資の協調、ギルドの連繫を掘り崩した『五反運動』は、變革の性質からみて、同じく復興段階（一九四九—一九五二）に實行された土地改革、反革命鎮壓運動、婚姻法貫徹運動など同一系列におくべき商工業分野の民主主義改革であつたと解すべきであらう。生産力の觀點からみるならば、それは傳統の固定性を破砕して、生産力の自由な發展への道を清掃するものである。したがって、もし中國の資本家階級が新しい生産力の擔手となりうるならば、中國はそこで資本主義の開花期を迎えていたといえるであらう。しかし新し

い生産力の擔手として躍り出たのは、『五反運動』を指揮し、またその最前線に立つた國家と工人階級であり、資本家階級は急速にその指導下に從屬することになったのである。

一 『五反』以前

革命につづく「共存」の時期は、復興段階の憲法『共同綱領』で公認された。それは、單に資本家企業の發展扶助を約束しただけでなく、民族資産階級が『民主統一戦線』のメンバーであることをはっきり規定した。しかし、これは中共が「共存」を信奉していることを意味しなかつた。資本家層が國民黨時代にひきつづき、投機、市場操縦、物價吊上げを主たる手段として經濟界を跳梁していたインフレ期（「解放」より一九五〇年三月まで）において、政府は同業公會を通じて、「解放」前に遡る七億ドルの工商業税と一億ドルの公債を割當てることにより、「闘争」の第一歩を踏み出した。一九五二年三月の急激なデフレ政策は、重要な轉機であつた。數十年にわたる投機的經營の一つの基礎が、一舉にしてゆすぶられた

からである。それから三カ月にわたるデフレ恐慌の中で、政府は初めて「商工業調整」の名の下に、資本家層にたいする経済的支配の手を伸ばし始めた。私営工業にたいする主たる管理手段としてその後全面的に擴大された政府および國營貿易公司による「加工・訂貨」（加工契約・發註契約）が、この時初めて採用された。公私商業の活動分野が劃分された。これらを通じて、政府は私企業の「連合經營」の形による再編成を指導した。政府はまた、資本家團體にたいする不信を捨てなかった。國民黨時代の全國および各都市における工業會および商會は、「解放」後間もなく解體させられ、同業公會のみが租税割當や命令、運動の傳達・動員機關として殘された。その後各都市の工商業連合會が政府の指導下に成立したが、全國的組織は、商工界の早からの要望にもかゝわらず許されなかった。

商工業者の資力は削減され、國家管理の體系は擴がった。國營セクター、とくに金融、重工業の實力が相對的に強化した。しかしそれにもかゝわらず、中國の資本家とその經營様式の本質は、ほとんど打撃をうけていなか

『五反運動』の性格について

った。デフレ恐慌でそれは投機的經營の基礎を失ったが、再建の開始と朝鮮戰爭介入に伴う活況を背景とし、新しく差し伸べられた國營セクターとの繋りにそうて、資本家は後背からその活動領域を擴げた。官僚との結托、資本家仲間の結合と、新しい暴利のチャンスが再現した。およそこのような姿が、『五反運動』に先立つ情勢であった。

『五反運動』の直接の端初をなしたものは、「五カ年計畫」にそなえて、新たな蓄積源を政府および國營企業の節約と増産の中に求めようとする『増産節約運動』であった。この運動はまず一九五一年東北で實施され、食糧千六百萬トン等價の増産節約額を産み出したが、同年十一月の人民政治協商會議全國委員會第三次會議は、毛澤東の提唱に應じて、一九五二年の年間一千萬トン目標の全國にわたる『増産節約運動』の開始をきめた。『増産節約運動』の準備過程において、一九五一年十二月初め、まず政府、國營企業、軍、黨における「貪汚、浪費、官僚主義」（これを『三害』と呼ぶ）反對のいわゆる『三反運動』が開始され、ついで一九五二年一月五日の人民政

協全國委員會常務委員會第三十四次會議で商工業界における『五反運動』に飛火した。『増産節約』のためには、官僚の間に滲透していることの明らかとなった『三害』の排撃が出発点とならねばならず、また『三害』排撃のためににはなかならず『貪汚』に關連して明らかとなった『資産階級の黨、勞働者階級、人民政府にたいする狂氣のような進攻』を破碎することが必至であるという形で、連鎖反應的に新しい問題が提起されて行ったわけである。これらの繼起的な運動が豫め豫定されたプログラムにそうて展開されたものであるかどうか、それは明らかでない。若干の材料からみると、中共は『三害』『五毒』の範圍を遙かに小規模だと考えていたふしがあるし、とくに當初の課題であった一九五二年『増産節約運動』は、漸く同年下半期に入って、年間目標を半年間で達成しようという一大緊張の下に進められた。しかしいづれにしても、『五反』、部分的には『三反』の目的を達成する過程において、中國商工業資本の基礎を掘り崩して行ったやり方は、きわめて計畫的、組織的であったといわねばならない。

二 『五反』の經過

『五反運動』の計畫性、組織性は、その經過そのものを概観することによって、半ば明らかにされる。運動の正式の責任者は『三反運動』の責任者、『中央節約検査委員會』の下に各市政府に設けられた『節約検査委員會』ないし『増産節約委員會』であった。各市『工商連』は『五反運動』の當初そのイニシアティブをとろうとして自發的に動いたが、その不適應性が證明された。かくて主導権は右委員會に移されたが、他のすべての運動と同じく、運動の實際の擔當者はむしろ總工會、青年團、婦女會等の「人民團體」であった。運動の經過は、鬭爭段階が比較的早く終った北京、天津などよりも、「中國民族資産階級が最も集中」し、「その惡毒の程度最大、その狂氣のような進攻が全國資産階級の首位を占める」上海や（陳毅市長、『解放日報』三月二十六日）、「香港、マカオに隣接する特殊環境」のため「五毒狀況のとくに嚴重」な廣東（朱光副市長、『南方日報』六月十五日）などの、鬭爭段階がより長期にわたり、かつより激烈であった地域の

方が、明瞭に描き出せる。上海、廣東では、『五反運動』は正式の運動開始に先立つかなり長い豫備段階と、四つの「戦役」と稱せられる正式の段階と、最後に處理段階の三段階から成り立っているが、これを上海についてみよう（資料はすべて『解放日報』による）。

豫備段階は「宣傳動員、普遍發動、坦白檢舉」の標語と呼ばれ、運動の先頭に立ったのは、總工會なかならず店員工會であった。皮切りは一月二十一日の中國店員工會上海市委員會の幹部動員大會で、これを境に二十萬店員を代表する二萬の支部幹部の動員工作が進められ、二月七日の店員代表五反運動會議ののち、動員工作は末端支部に滲透することになった。動員工作の主眼は、資本家階級と工人階級の階級本質を認識し、「兩者の階級境界を劃清する」ことに向けられ、その具體的效果として、店員の店主にたいする「坦白」（告白）勸告、「檢舉」（摘發）が相ついで、豫備段階は二月二十日の百萬の組織員をもつ總工會主催の上海工人『五反運動』代表會議で高潮に達した。この日までの工人・店員による檢舉材料は三十萬件に及んだ。

『五反運動』の性格について

第二段階は、三月二十五日の市、區増産節約委員會擴大連席會議における陳毅市長の上海市『五反運動』正式開始の宣言とともに始まった。しかし實は、『増産節約委員會』はそれに先立って一萬餘の工人、店員に訓練を施して群衆發動工作に投入し（『五反工作隊』）、またその一部と各機關、部隊から選抜した幹部、他地區から來た幹部で『五反検査隊』を組織し、檢舉材料を検討し、検査重點を確定していた。その上、第二段階の序幕戦をなす『第一戦役』はすでに三月二十一日開始され、『検査隊』七十四隊は、工人、店員の歡呼の中に、三十六行業の七十四戸に突入していた。これらの検査隊は各工商戸の工會組織を助けて、高級職員をふくむ全職工を發動させ、「訴苦大會」を開かせ、不法資本家との峻烈な「對面鬭爭」を行わせた。一部資本家は自動的に坦白を行い、「立功贖罪」の決意を表明した。

『第二戦役』は、四月一日から開始されたが、その特徴は、その數一千個にふえた『五反検査隊』が、今度は直ちに出勤するともなく「嚴として待機」し、「戦わずして勝つ」戦果をあげたことであつた。検査を豫定された

二千戸の重點違法工商戸のうち、千戸はこうして坦白し、五百戸は「一觸にして潰え」、「激烈な戦闘」を経たものは僅か四百前後に止まった。これは一つには工人、店員（高級職員をふくむ）および家族の動員が徹底したからである。「五反工作隊」はこの間二千五百四十個、五萬餘名を擁するにいたり、群衆工作とともに個別企業の工人、店員の闘争を助けた。一方、各區は検査対象の資本家會議を開いて坦白を勧告し、坦白を拒む違法戸には検査隊を出動させた。自動的に坦白した資本家は行業毎に小組に分け、資本家相互間で「自報互評」を行わせた。『第一戦役』の七十四戸を始めとして『五反立功小組』が擴大し、同業の坦白を勧告し、または檢舉を行った。さらに十六萬戸の中小商工業戸のうち一萬戸にたいし迅速かつ寛大な處理が行われたことは、『五反統一戦線』の擴大に役立った。四月二十日から開始された『第三戦役』では全市で普遍的に大工商戸の「全體老闊會議」（老闊は總經理、經理、廠長、副廠長、副經理を總稱）が開かれ、ついで同行同業を基礎とする「互助互評」が行われたこと、普遍的に「資本家家族會議」が開かれたことが特徴である。

った。『第四戦役』は五月五日より始められ、以上の戦果では孤立するに至つた残りの違法工商戸にたいし闘争が挑まれ、六月十二日遂に處理段階に移るのである。

三 何が闘われたか

さて、このような激烈な闘争を通じて、「坦白」や「檢舉」の対象とされた資本家の罪行は何であったか。いわゆる『五毒』については、多くの説明を要しないだろう。「贈賄」や「脱税逃税」は、國民黨時代から續いていた傳統であり、「國家資材の盜竊」や「加工賃、原料のごまかし」は、デフレ恐慌以後普及した政府、國營貿易公司の、民營企業にたいする「加工・訂貨」を通ずる「贈賄、脱税逃税」の異つた現われであつたとみてよい。「國家經濟情報の盜竊」は支配的な國家管理經濟にたいする同じ傳統の一現象形態である。これら『五毒』の規模は、たとえば全國の逃税脱税額が、『五反運動』當初、既納額の二〇％ないし二五％によると推定されていた（『人民日報』五二年一月二九日、中央財政部稅務總局長論文）ほど廣汎なものであつたが、それが闘争の対象とされることは、當

然といえは當然である。問題はそれよりも、まず「五毒」が「不法資産階級の國家と人民に向い狂氣のように進攻する主要形式」として理解され（彭眞、四月十八日「中華人民共和國憲治汚條例草案に關する説明」、資本家と官僚の特殊な結びつきの形がとりあげられたことであつた。

その結びつきの形、つまり資本家の官僚にたいする「腐蝕作用」の無數の事例は、「拉過去」（ひきずり込む）「派進來」（もぐりこむ）の二つに分類された。「派進來」の典型は二月一日の北京大貪汚犯公審大會で死刑に處せられた中國畜産公司業務處副處長薛崑山であつた。かれは

元來張家口の普通の皮毛商人であつたが、一九四五年張家口解放のとき、晉察冀邊區貿易公司と合辦で福義和皮毛棧を組織し、一九五一年さらに中國畜産公司にしのびこみ、職權を利用し、國家經濟情報を盜竊し、その經營する十九家の商號に服務した。その非法財産は二十三億元をこえた（『人民日報』二月二日）。上海における「拉過去」の典型は、文華筆廠の「大騙局」である。李樂平はかつて一牙刷廠のセールスマンであつたが、知りあいの華東區百貨公司職員魯との關係で同公司文房具採購員毛、

『五反運動』の性格について

王、孫と拘結し、一九五〇年初の國民黨の上海封鎖にさいし文華筆廠のにせ看板を出して「騙局」を開始した。

當時一文の出資金もなく、工場、機械原料もなかったにもかゝらず、買入れたペン先を同公司に暴利で納入することによって逐次資産をなし、同年七月李は毛、王、孫と合夥契約を結んで「股東大會」を開き、毛、王、孫に「創業の功績」と「販賣上の盡力」を理由に股金の四割を持たせた。その後同廠は二十億元の資金をもつにいたつた（『解放日報』二月十六日）。

「五毒」が、同業間ならびに同一企業内の資本家、高級職員、親戚職員の間のいわゆる「攻守同盟」を基礎として發揮されたことも、鬭争の重要な對策の一つとなつた。同業間の「攻守同盟」としては、政府が獎勵した「連購・連銷」のもっとも初歩的な統合形態が、そのまゝコスト引上げ、市價吊上げの組織となつた事例（『解放日報』二月六日、元寶鋼鐵號店員稿）から、重慶の鋼鐵機械工場十二の秘密組織『星四聚餐會』を核心とする中型機械廠の『星五聚餐會』、鐵道關係鐵工廠の『新星五聚餐會』、造船修理關係の工廠による『造船小組』等の大規模

な組織に至るまで（『新華日報』三月一日）、さまざまである重慶の組織はこれによって『五毒』の限りをつくした上、市人民代表會議の選舉を操縦したといわれる。

最後に、『五反』の闘争は、どのようにして行われたか。上海の運動經過で明らかのように、「戦役」は工人、店員、高級職員を動員し、階級教育を施して、資本家と對決させ、家族と同業の資本家を闘争に驅り立てることを「作戦」の基調としていた。しかし、これら各層の躊躇と、また資本家の激しいレジスタンスの前に、その作戦が奏功したのは何故か。われわれは一九五二年にいたる迄の各種運動を通じて、工人、店員、青年、婦人の階級意識なくなく國家意識が、すでにかなりの高まりを示していたことを想起しなければならない。總工會ななくなく店員工會のみならず、民主婦女連、全國青連は、運動を通じて數次のアピールを出したが、資本家の威脅、打罵や停業、減俸、解雇のおどかし、また利誘、籠絡に屈せずかれらがこれに應じて起ち上つたのは、政府の保護もあったが、それだけの意識的準備があったのであろう。動搖の深かったのは、平常資本家と接觸し、その「小恩

小惠」をうけ、またその不法行為の片棒を擔いだ老店員、高級職員であった。かれらは一面温情主義にとらわれ、また檢舉により自らに災のふりかゝることをおそれた（『解放日報』二月十五日）。『五反』指導機關は、その發動いかんが「五反」の成否の一つの鍵となるとこれを重視し、その訓練班を設け、高級職員座談會を開いて、かれらもまた工人階級の一員なること、過去の誤ちは資本家の利用と陰謀のせいであることを教育した。『第二戦役』後半にいたって、高級職員の「紛々たる歸隊」が報ぜられた。「隊」はいうまでもなく、工人階級の隊伍であり、「五反」闘争への参加であった（『解放日報』四月十九日）。資本家の女兒が父親の違法事實を檢舉した事例は、「五反」當初からかなり豊富であった。しかし家族の坦白勸告、檢舉が活潑になったのは、上海婦連が各區、各行業毎に工商戶家族動員會、座談會を開き、また三千の分會幹部、積權分子を選抜して、工商戶家族發動の骨幹とした『第二戦役』以後であった（『解放日報』四月二十日）。資本家はそこで「上に國家あり、下に子弟あり、旁に工會あり、内に店員あり」と四面楚歌を嘆いたが（『解

放日報』二月一日)、敵はそれだけではなかった。

新聞報道によるかぎり、最も激烈な資本家相互間の闘争は、上海商業儲蓄銀行天津總經理資耀華にたいする闘争であった。かれは一月十五日以来の全市銀行業大會以來、その犯した二重帳簿陰匿、燒却、黄金空賣その他の違法行為につき坦白不徹底を糾弾され、同行副理二名、新華、中國實業、中國實業、建業等八行の全經理、副理、襄理らから會場で檢舉をうけ、『進歩日報』二月二日、その後なお否認をつづけたため、二月上旬の『進歩日報』は、その董事長をとめる東亞企業公司董事會および中國旅行社の全職工、上海銀行全職工、副理、襄理のほか天津各大銀行の糾弾、新違法事實の檢舉、政府への最重處分要求等の投書で賑わった。資本家相互間の闘争には、多分に自己保存の動機がふくまれているだろう。しかし同業を檢舉して、自らの生きようとするところに、同業連帯の崩壊があった。上海では連帯感はより強く、なかならず工商連幹部においてそうであった。一月十九日から二十六日にいたる工商連常務委員會、執監委員會等で、榮毅仁、胡厥文、劉鴻生らの指導者もそれぞれ坦白

『五反運動』の性格について

を行った(『解放日報』一月二十九日)。しかし二月五日の市増産節約委員會、市協商委員會の擴大連席會議では、政府は「大聲疾呼して工商連執監委員と同業公會委員の誠意ある坦白を求め」、かつ工商連から「五反運動」の指導権をとりあげた(『解放日報』二月七日、三月三十日)。資本家の牙城が崩れ、相互間の闘争が擴大した。

四 五反のかなたに

『五反運動』は、一九五二年六月十三日の中央人民政府政務院「五反運動打切り中の數個の問題に關する指示」とともに、全國にわたり急速に終束過程に入った。大多數の違法工商户にたいして寛大な處理が與えられたというが、甚しきは一九四九年十月に遡る違法所得の「退財補稅」額は巨額に上り、私營商工業の力を著しく殺ぎとった。しかしそれにも増して重要なことは、『五反運動』の遺産として、資本家が個々の企業活動につき、工會の全面的監督の下に立たされたこと、政府、國營企業の「加工・訂貨」、「代購・代銷」などの下請に依存する程度が著増したことであった。懸案の『全國工商

10、

連』は、『五反』後の一九五二年六月二十日北京でその籌備代表會議が開かれ、越えて一九五三年十月二十三日正式の會員代表大會が開かれたが、その席上では李維漢財經委員會副主任が『過度期の總路線』と私營商工業にたいする「利用、制限、改造」の政策について重要講話を行った。私營商工業の方向は、公私合營を最高形式とする「國家資本主義」を経由して、一步一步社會主義的改造を行うにあるというわけである（『人民日報』五三年十一月十日）。『工商連』の發足から今日にいたる迄、公私合黨を申請する私營大型企業は日に日に増した。

これをいいかえるならば、傳統の固定性から解放された生産力は、資本家とその企業が個別的に國家の指導をうけ、個別的に工人階級の監督をうけるという形で、發揚されていった。『五反』により一度脱皮した中國の資

本家が、新しい生産力の擔手としての能力をもっていなかったかどうか、それはわからない。しかし明らかな一つの事實は、一九五三年以來再度、不法資本家の『五毒』が増大の傾向を辿つたといわれることである（『人民日報』五四年七月八日社説）。この『五毒』は、それを放置すれば、『五反』により激しい打撃をうけた家族、ギルド、パターナリズムまでも除々に復活するかも知れない。このような豫想こそは、中國の資産階級にたいする中國共產黨の根強い不信と、さらにまた、『五反運動』と平行して資本家を個々に自らに従屬させる防禦措置をとらしめた計畫的配慮との、一つの重要な背景をなしているといえるであろう。

（一九五四・八・二一）